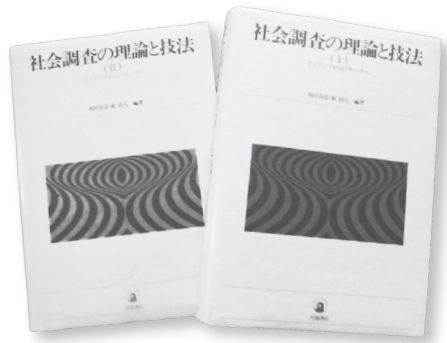


新睦人 奈良女子大学 名誉教授



西田春彦・新睦人編著

## 『社会調査の理論と技法 — アイディアからリサーチへ』

(I) (II)

川島書店

- (I) 初版1刷 1976年3月(写真右)  
第8刷 1988年3月  
(II) 初版1刷 1976年11月(写真左)  
第5刷 1984年6月

理論と調査との間柄は相即的であることが望ましいということは、言葉で語るのはそれでよいとして、なかなかどうして、実際に行うのは簡単ではない。このフレーズは1850年代の社会学創始の時代以来のスローガンであったが、今なお生きているように思う。私が学んだ1950年代には、もちろん、福武直先生の『社会調査』(1958, 岩波書店)など、いくつかのテキストがあったが、自分がアメリカで学んだ時の社会調査テキストを訳しながら講義するというオールタイプ先生もあった。そのほうが新しい情報であるという考えがあったのだろう。「理屈はそれでもよいのだが」という気持があった。けれども、調査の実際は現地での情報収集を目的としているから、そのための〈実習〉が必要であった。京都大学では、白井二尚先生の村落調査が必修化されていて、日本各地の村

落を訪ねては先生特有の調査項目を忠実に聴き取るという地味な調査実習であった。統計的なサンプル調査の手続きだけでなく、〈現地で村人たちから聴きとる〉という実習経験、小さいながらも日本社会の断面で、まったくの他人のなかで方言を聴き取りながらデータを集めるという作業を、地味だが大切な意味を学習させていただいたと今では感謝している。そうした実習は無理な水準としても、テキストを勉強して、実地調査の直前までのプログラムを立てられる、良いテキストが欲しいと私は考えた。私の場合は、博士論文を執筆するという外在的な理由もあって、調査による理論の裏づけが必要であったから、社会学者として誇りうる論文を完成するためにも、私自身の調査プログラムを立てる必要があった。そのために、私自身は、既にヨーロッパ都市のコミュニティ的な特質を予備的に把握する作戦を立てて、数度にわたり現地で資料収集を行ったり、歴史的な背景を概観する著作も準備したりしていたから、綿密な論文作成と日本における実証手続きが、私自身の目の学習課題でもあった。

今だから、私的な事情を告白してもよいと思うが、博士課程を終え、幸いにも旧大阪府立大学の教養部助手に就職して3年を経た1968年の頃、上司であった岡村久雄先生から、専門課程で社会学の専門として研究と教育ができるのが望ましいかろうと意外なお勧めを受け、先生のご尽力によって、奈良女子大学に移籍の話が持ち上がった。岡村先生、恩師の白井先生、奈良女子大学家政学部長であった山本嘉男先生の間でご相談のうえ、急遽、家政学部の助教授に転出することになった。経済学者の山内豊二先生と協力して、「家庭経営」という新しい文科系学科の準備をするようにという要請であった。そのうちに文学部のポストが空くから、その際には優先的に学部間の移籍をすることにしようという、今思えば、いい加減な約束で移籍



した。奈良女子大学も、家政学部も初めての経験であったが、京都大学や府立大学の女性版であろうぐらいに気楽に考えていた。しかし、着任してみて、ややこしい学校であることが少しずつ分かってきた。そのうえ、時は大学紛争の季節であって、奈良女子大学も紛争の〈洗礼〉を受ける次第になった。東京大学も京大も、そして全国の大学が学生たちの不満の矢面に立った時代である。私が所属した家政学部という学部は、先生たちのほとんど全てが理科系出身の才媛たちであったから、結局、紛争の矢面に立ったのは、山本学部長以外は、私たち文科系の二人であった。紛争が進んでいくと、紛争にかかわる学生たちはどのような原理で行動するのか、〈民青系〉はどのような要求を出してくるか、また〈革マル系〉はどうか、といった想定が大切な情報でありえた。ウェーバー的な行為論の世界であった。当時の教授会はいつも、そうした予想で持ち切りであった。「面白い」といってしまうと軽薄だと叱られそうだが、その予想はよく当たったのである。紛争を起こす側に立って想像すれば事態はよく見える。理科系の才媛たちにとってはまるでちんぷんかんぷんな事態でも、社会科学系の私たちにはごくあたりまえのように「見えている」ということが、学部の意見を的確にまとめるのに役立った。当時の大学における雰囲気とあいまって、それまでは実験室的なデータしか認めていなかった才媛たちと私たち文科系の間で一種の共益性と連帯感が生まれた。調査論の立場に帰して言うならば、頭脳明晰な才媛たちのうちには、社会の常識的な、どう見ても曖昧な性質をもった世界にも、解釈を丹念に組み立てて状況についての〈仮説〉を作ることの意味が理解できた人物がいた。紛争当時に私が引き受けていた社会調査の授業にも、文学部の学生だけでなく、家政学部の住居学や食物学、理学部の数学の学生たちが参加して結構たのしい授業になった。才媛たちが自分たちのゼミの学生に勧めたらしいことが後で分かった。

そうした授業のなかで、「良いテキストが必要ではないか」という、教師としての自覚と願望が強くなってきた。そこで、大阪大学の甲田和

衛教授に相談した。特別な知り合いだったわけではなかった。それどころか、しばしば辛口の批評をしてくださったという関係であったが、それだけに、人間を見る目も確かであろうと私は判断した。「信頼できるテキストが欲しい。できることなら、〈調査バイブル〉とでも言えるような良いテキストにしたい」という私の要望を理解していただけて、編者とライターが信用できることと、そのテキストどおりにマスターしたら、安心してデータ収集ができるような、二つの意味での〈良い〉テキストを作成するために協力しようという結論になった。編者としては、西田春彦教授のお手伝いをいただけることになった。問題は、私がこの本のサブ・タイトルとして示しているように、「アイディアからリサーチへ」のフルコースを具体化するには大部な書物になるという悩みがあった。結局は、2冊になったが、実地調査によってデータを収集する詳しい手続き論と、それをデータとして洗練するための統計的な手続き論とをⅡ巻のなかに含む形で、一冊にして分離することになった。ありがたいことに、安田三郎先生や直井優先生などがテキストの趣旨を理解していただけたこともあって、東大やその他の大学でテキストに採用してくださった。そのため、心配したほどには出版社の川島書店にご迷惑をかけることもなかった。

この本のなかで私が最も大切に、多くの人たちに読んで欲しいのは、理論を仮説に組み替える作業の大切さである（Ⅰ巻、第2～3章、とくに第3章）。「理論と調査との相即、統合、収斂を可能にする媒介項は仮説の構成である」と私は確信している。理論的な構想力が活躍するのは仮説づくりであるし、歴史的なパースペクティブが効果をもつのも仮説づくりである。この信条は今日でも変わらない。今でも、学会の席でよく拝聴する報告には、報告資料によって何を伝えたいのかは詳細なデータで知ることができるものの、その研究がどのような考え、大袈裟にいうと、どのような理論的思考をデータにしたかったのかがよく分からない場合がある。仮説を組み立てることによって柔らかな思考力を試して欲しい。